

# 大野修平のDisques Guide

(シャンソン評論家)

## 「新春新進シャンソン歌手ショー」に出会った

今回は番外編。あらかじめ書いてあった原稿を急に書き換えたくなくなってしまった。編集サイドに原稿を渡す直前になってこういう暴挙に及ぶのは、決して褒められたことではないのはよく分かっているつもりだ。関係者のみなさんには心からお詫び申し上げます。

「ディスクガイド」も、もちろん大切に考えている。またその一方で、ライブの魅力というもまた僕を惹きつけてやまない。しかも、それが思いがけない時と場所で出会ったのだから、これを記録して読者のみなさんと共有したいというのが僕の想い。では、僕の話をお聞かせください。

2月18日のこと。池袋西口の東武百貨店SPICE 2の2階にあるイタリアンレストランで人に会う約束があった。先にも書いたように、原稿のメドもついたという安心感から心も軽く西池袋公園の敷地を横切って行った。池袋はわが母校のある地でもあるので、古巣に帰って来たような感慨もあった。約束の時刻までまだ10分以上ある。

東京芸術劇場の近くまで来ると、女性の声が聞こえた。「これからシャンソンショーを行ないます。20分ほどですので、よろしかったらご覧ください」。声のする方を見れば、黒づくめの男性がキーボードを調整している。黒のドレスに身を包んだ女性歌手が、これから歌う曲目を記した黒板を足元に置いたり準備の真最中。よくレストランの入口に黒板に手書きされたメニューが掲げられているけれど、まさにあの手作り感が漂っている。そこに書かれている曲目は次のとおり。「街角で」「オー・シャンゼリゼ」「ミロール」「リリー・マルレーン」「マイ・ウェイ」。

「これは面白そうだな。でも困った、約束の時間に遅れてしまいそうだな」。行くべきか、留まるべきか…。遅疑逡巡。次の瞬間、面会の約束をした相手二人に心のなかで謝っていた。「彼らが披露するのは5曲だそうだから、ちょ



っとだけ遅れることを許してくれませんか、ごめんなさい」。

勝手に自分に許しを与えて、東京芸術劇場の出入口前に陣取った二人を見た。幟が風にはためいている。ピンクの文字で「ヘブンアーティスト」と大書してある。東京都の文字とイチヨウのロゴマークも見える。ということは、都公認の大道芸人として活動している人たちだということが分かる。パリの地下鉄内で演奏したり、街頭でパフォーマンスを見せたりするアーティストたちも、ちゃんと許可を得て営業しているのと同じなんだ。

「街角で」という曲から歌い始めた。ダミア Damia の「街」「La rue」やシャルル・トレネ Charles Trenet の「街角」「Coin de rue」とも違う。オリジナル曲かもしれない。

「オー・シャンゼリゼ」では、既存の訳詞とは違う歌詞で歌っていた。ルフラン（繰返し句）で「いつも何か素敵なことが」という箇所を「恐れもなく云々」としている。原詞では「Au soleil, sous la pluie... (オソレイユ、スウラブリユイ)」という箇所。「オソレイユ」を「恐れ」という音に対応させている。シャンソン評論家としても、日本訳詩家協会副会長としてもこういう点に興味をそそられてしまう。やっぱり、遅刻しても観ることにしてよかった。

「ミロール」の代わりに別の曲を歌ったのだけれど、メモしていないので忘れてしまった(失礼)。「マイ・ウェイ」も無理なく声が伸びていて気持ち良く歌い納めた。終わってから観客に目を向けながら、女性歌手は髪に巻いた黒いリボンをはらはらとほどく。そこには金色の文字でこうあった。「アンコール曲」。言葉ではなく、文字で伝えるパフォーマンスも面白い。拍手を贈ると、「愛の讃歌」が始まった。これもよく人口に膾炙した訳詞ではなかった。

差し出された帽子に小銭を入れ、名刺を渡した。女性歌手の名前は、あやちクロードルさん。男性ミュージシャンはイーガルさんというそう。詩人の作品に曲をつけたり、クラシックから現代曲まで幅広くレパートリーにしているという。

思い出せば、かつてエディット・ピアフはパリの街角で歌い始めた。最近の例を持ち出せば、ZAZだってモンマルトルの路上からキャリアを始めている。



シャンソンの原点としてストリートがあることも否定できない。

思いがけない「新春新進シャンソン歌手ショー」を楽しむことができた。ありがとうイーガルさん、あやちクロードルさん。彼らのようにいろんなジャンルの音楽が好きで、シャンソンにも新しい感覚でアプローチしてくれる若い才能に声援を贈りたい。

